

平成24年度 第1回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録

【日時】平成24年7月5日（木）午後7時30分～午後9時30分

【場所】市役所6階 602会議室

【出席者】

〈河内長野市文化振興計画推進委員会委員〉

谷 悟・千原 喜美・魚返 普子・川上 勝・小西 朋子・白井 春夫・寶楽 陸寛・
松村 千恵子・南 美鈴・山田 淳子・渡辺 正直

〈事務局（河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課）〉

井上・内田・東畑

〈オブザーバー（公益財団法人河内長野市文化振興財団）〉

大久保

【配布資料】

- ・平成24年度 第1回河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・資料1 第28回河内長野市文化振興計画推進委員会議事録
- ・資料2 議論の分布図の分析について
- ・ラブリーニュース他

以上

井上課長

本日、開催にあたりまして、谷委員長、そして、川上委員、南委員、宝楽委員、事前にお集まりいただきまして、夜遅くまで議論していただきありがとうございました。

この場をおかりしまして、厚くお礼申し上げます。

なお、今年度が第一回目の開催となり、この4月でございますが、私どもの方で、人事異動がありました。昨年度、文化国際を担当しておりました職員の廣中が、隣の課の生涯学習課に異動になりました。そして、同じ教育委員会内ですが教育総務課の主幹の内田がこの度、文化国際担当として異動となりました。廣中同様、よろしく願い申し上げます。

谷委員長

前回、事務局から「文化振興策の方向と具体策」に係る取組み状況について説明があり、どの程度、具現化されているか把握することができた。今回は、事前に幹事が集まり、その討議内容を反映させた表（資料2）を宝楽委員が中心になって作成した。

見方としては、表の横軸に、河内長野市文化振興計画の5つを核である、「文化に参加する」、「文化を創造する」、「文化がつなぐ」、「まちづくりとしての文化」、「河内長野らしさの視点」の項目を縦軸に整理する上で色々な言葉を出してみ、縦と横を合わせるとどうなるかを分析した。

その結果、明らかになったことがある。例えば、縦軸の三つ目に価値転換（切り口）という項目と、横軸の「文化に参加する」という項目で見ると、茶色の部分に「市役所ロビー／市民サロン、ロビーコンサート」を市が実施したという内容が記載されている。市役所のスペースでコンサートをするということは価値転換である。書類を発行するとか、受け取ったりする場としての市役所に来ながら、知らないうちに文化に遭遇してしまう状況は、まさに、価値転換（切り口）の成し得る技とすることができる。

また、資料2の二枚目では、ある結果が浮かび上ってきた。例えば、黄色の部分、「委員会での意見と市の政策が合致している点」である。皆さんが活発に意見を出していることと、市の政策が非常に合致しているところである。一方、委員会において、意見が多く出されているが、行政が対応できていないものがあることがはっきりわかる。委員会の皆さんが活発に意見を言っているのに、行政がやりにくい、どうやっていいのかわからない部分である。ただ、これらについて、全部対応しなければならないわけではなく、時代の変化にともない、実施しなくてもよいと判断できるものもあるかもしれない。

さて、まず、資料2の一枚目の「文化を創造する」という項目で、「地域資源を発見する調査」、とりわけ、人に焦点をあてたりサーチについては何度もその必要性を説いている。河内長野には、世界的に著名なアーティストも住んでいるし、人間国宝に認定されている作家もいる。一方、一般市民の中には、魅力的な活動をされている人、本人が気付いていないが、レベルの高い表現活動をおこなっている方がおられる可能性があり、私はその人たちとの出会いを非常に楽しみにしている。それは、ハイアートの世界で活躍する芸術のプ

ロフェッショナルにとどまらず、市民文化を育み、推進するキーマンや豊富な文化財を有するまちにふさわしい伝統文化をまもる人々、更には未来のアートの扉を拓く潜在的なパワーをもつ子どもたちの存在をも網羅する必要性を痛感していることを意味する。

この作業は、河内長野市の文化、芸術を支え、発信していくような人たちを発掘することであり、データベース化することになるかと思うが我がまちの体温が感じられるものとして展開させなくてはならないと考えている。

実践に関しては、実行委員会を立ち上げ、最初はフリーペーパーを発行するかたちで、取材した内容を〇〇編と数種類に分けて制作する。例えば、すばらしい職人がいる場合、柳宗悦氏の民芸運動のように名もない職人の中に、極めて独創的な仕事をしている人を注目することは大切であると考え。いきなり本を作るのは大変だから、無理をせずに、様々な特集を組み、継続させることが重要であろう。また、そのコンテンツは、市のホームページと連動させたり、その成果を展示する展覧会やトークセッションやワークショップを開催するなど色々な活動へと発展させることができると考えられる。このテーマに焦点をしばって検討したいと思うので、どのような方法でデータベース化が可能なのか、如何なる優先順位が必要かなどの問題を皆さんと話し合いたい。今回は、全体で議論を進める前に、まずは、委員どうしで意見交換をするという方法をとりたいと思う。それでは、宝楽委員、その方法を解説して下さい。よろしくお願いします。

宝楽委員

今までの課題を話し合っていく中で、委員長から話があったように、まず、「地域資源としての人」の発掘をこの委員会のテーマとしていきたい。そして、具体的にどういうプロセスで議論していくか検討したい。

まず、ペアになって、ペアで疑問点をだして、そのあと、ペアでアイデアやテーマを出し合って、そのあと全体で意見を共有する場を作ってはどうかと思う。時間としてはペアで10分、ペアで10分、全体で30分をお願いしたい。お互い合意できた点を出し合って、共有しながら進めていきたいと思う。

前回の委員会で、行政として出来ていなかった部分を現実的に充実させる方策等を中心に委員会で改めて、検討し提言していきたい。

谷委員長

各委員で考えてきたことも含めて、この問題について整理して欲しい。

宝楽委員

では皆さん、感じたことを話し合ってください。

今日出た意見や疑問等を含めてアイデアを出し合い、これを幹事会で持ち帰ることになる。

松村委員

先日、ラブリーホールの20周年記念の式典に出席した。

河内長野の文化のレベルをはかるところといえば、ホールで催されるいろいろな行事と思う。それで、他市から来た人も、そのまちの文化のレベルの高さをはかられると思う。ただ、4月22日は私が想像した式典と全く違った。単にホールを使った回数が多かったことを発表されただけであった。せっかくいい腕をもった人がいるのがわかっているので、質の高い人を今、掘り起こすことが重要だなと感じた。そして、これらの人は、このまちに住み芸事に携わり頼まれたら、20周年記念ですから、自分のすべてを投げ出してでも協力したいと思うものである。他の人もいろいろ感じておられると思うが、式典だけにちょっと残念に感じた。

宝楽委員

つまり、河内長野市にある資源とか人材が活用されていないということ。

続いて、具体的にこの委員会でのテーマをどう絞りこんでいくかについて議論していく。

千原委員

観光とのコラボレーションですね。

私は、サイクリングの場所が欲しいと思う。今、非常にサイクリングが人気で、また、女性のみなさんは急にいでたちを変えて金剛山に行ったりしている。

谷委員長

自分が提案したことですが、どのようにしたら“人の発掘”ができるのかについて検討していきたい。レベルが高いアーティストや伝統の領域で活躍されている方は、ある程度、把握できると思うが、河内長野の風土と向き合い、そこで得られる材を活かした職人や本人は何も自覚していないが、芸術を実践、研究している者が驚くぐらい独創的な表現活動をしている一般市民をさがす作業はユニークな取り組みとなるだろ。また、個人的には、好んで使わない用語だが、アウトサイダーアートと言って、福祉施設等において、芸術家という認識をもっていないが、私達がびっくりするような作品を作っている人がいるかもしれない。その人達も福祉の領域としてではなく、芸術文化を育む市民として、探していきたい。プロと比べれば、技術的には拙いかもしれないが、発想の部分に光をあてたい。プロが考えられないような表現があるかもしれない。そのような人たちに私は会いたい。例えば、老人ホームに、手芸が非常に得意なおばあちゃんがいるとする。ものすごく大きいマフラーを編み、それを30人、40人で包まれながら、何かのテーマで語り合う行為はパフォーマンス作品になる可能性を秘めている。日常、使うもので、私達がエキサイティングしてしまうようなものを創るような人がいたら、コンテンポラリーアートとして、コラボレーションできるかもしれない。そんな、おじいちゃん、おばあちゃんに私は会いた

い。これは、福祉編、高齢者編という視点ではなく、ユニークな市民文化であると捉えたい。そのような人たちと出会うためには、縦割りを超えて、いろんなところに網をはる必要がある。いい意味で変な人、個性的な人に会いたい。私はここに、大きな価値を感じる。老人ホームや共同製作所は福祉の領域で、芸術文化が踏み入る必要がないとは思わない。私達が脅かされるような才能をもっている人も含めた、とんでもないデータベースを作りたいと考える。

魚返委員

河内長野市年齢別人口で、1歳は709人、2歳が758人、3歳が823人、10歳までが1,000人未満。かろうじて、中学生あたりから、1,000人くらいになる。それから、逆に多いところでは、60歳が、1,799人、それから73歳ぐらいまでが1,450人。そういうのを考えると、理想の話かもしれないが、人数の多いところにたくさん参加してもらえるようなことをすればいいのではないかと思う。

渡辺委員

それからピークのところは、60歳から70歳までで、約2,000人弱である。

宝楽委員

多いですね。

川上委員

河内長野市の人口は11万人ぐらいで、その人口に対して有権者が約9万人、つまり、20歳以上が9万人いる。圧倒的に若年層がない。

魚返委員

私の発想ですが、河内長野市は府内でも3番目の面積をもち、空気が穏やかなこと、60歳から73歳ぐらいの人口比率が多いこと、この三つの内容から、このようなことを考えた。

この条件から、文化振興計画とどうかわっていくのか考えた。河内長野は水もきれいだし、電力もすごいと言われたい。広大で穏やかな土地をフル活用し太陽光発電に自分達の力で取り組む。1400年も前、海を渡った先達の誇りを今も脈々と伝えるべきだと思う。これはくろまるさんのことである。このくろまるさんの人並みはずれた真摯の気性や精神に学ぶことが必要である。子どもの人数ですが、今年に入って就学児が778名と下ってきている。そうなってくると、廃校もでてくる。注目すべきは福井県が学力、体力とも抜きん出ている。また、三世帯家族も上位だという。情緒豊かな、人と人の間に子供が育っていくと思う。ここで、三世帯同居は、今時、無理ですが、60歳から73歳ぐらいまで

のお助けマンの方々に頑張ってもらい、挨拶の声をかけるなど、そういうことから、囲碁、将棋、陶芸、折り紙など、文化は広がり传承されると思う。もし、叶うならば、これに優秀アートの伝道みたいなのがあれば、最高である。子供たちは情緒豊かな景色を見ながら育まれると思う。

それから、くろまるの件ですが、塾やポイントで知れ渡ってきたが、くろまる精神をもっと本当の形で浸透できるようミュージカルも然り、優秀な環境もスタッフから、もっと学びたい。学習館もくろまる塾のアクセスの拠点にしてほしい。

河内木綿は、大好きな図柄だが、再現まで、時間が当分かかりそう。一流企業では、省エネシャツとして刷り込んでいる。そこで、市役所あたりから着て欲しい。とにかく一番いい素材を、白でも何でも、そこに刷り込んでもらいたい。そして、一般で売り出されても、いい地方の物産ができるのではないかな。

宝楽委員

まとめると、太陽光発電の活用ということ。それに、くろまる館のアクセスが悪いため、くろまる館の活性化の必要があること。

それと、子どもの話があった。

文化の担い手から学ぶということ。ミュージカルもあるし、ホールの職員から学ぶという視点が必要ということ。

あとは、河内木綿ですが、既存にある資源を職員から利用すること。

魚返委員

あわてて食料品を作るのもいいが、既存の物を利用して、他にないものを、そんな気がする。

宝楽委員

既存の物を利用する視点や太陽光発電を活発化するという意見があった。

川上委員

ずっと同じことを言っていると思うが、ここで意見を言われて、その意見がどういうふうにとどこに反映しているのかしてないのか、誰の耳に入ったのか入ってないのか、どの人が共感しているのか共感していないのか、いわゆる成果を確認しないといけないと思う。私はそれがすべてだと思う。何をするにしてもイベントも行政もそうだが、ひとつの施策を実行したときに、実行したことで終わっている。市民も実行してもらったことで終わっている。実行したことによって、何が変わったのか、変わってないのか、コストパフォーマンスがどうだったのか、行政として得るものは何だったのかといった成果の確認ができていない。そこをしないといけないし、成果があがってないと感じた人は、成果があがって

いないと声を大きくすべきである。その声のキャッチボールができる場所が欲しい。それが以前から言っている、文化の駆け込み寺のことになる。ラブリーホールがその機能を果たしていない。だから、それでないところに、文化の駆け込み機能をもった、こんなことをしたい、私はこういう音楽をやっているが、どう思いますか、みたいなことも含めて先ほど委員長がおっしゃった、自分では自分の才能はわからないんだけど、誰かに聞いてもらったらわかるかもしれないって言ったら、それができる場所を簡単につくるべきである。作ろうと思う人が作ったらいい。そして、作って、何が変わったのか、変わってないのか、その人がすごかったのかそうでなかったのか、評価でなく成果を、お互い確認する機会と場所が欲しい。それをやらないとやりっぱなし、やられっぱなしで終わっていくと思う。

それを失敗で終わらせないだけのいろんなことにかかわっているアーティストが河内長野市にいるし、それをプロデュースされている人もいる。アーティストコンサートや自分でギャラリーをしている人など、確実にされている。それをうまく編めてない。では誰が編むのか、編まないといけないと言った私がしなければならぬと思っているが、編めばいいと思う。これをしないことには、おそらく点でしかない。残れない。そういうことが整理できる拠点なのか、こういう集まりなのか、そこまで整理が全くできてないが、そこを今、進めていく必要がある。でも、しないと、先程言われた、1歳が何百人というまちは、今のうちに、先に進んでいる人間が若年層に物を伝えて、継承していかないと、まちがなくなってしまう。それを今、しておかないと、もうあと10年たったら、ほとんど取り返しのつかないことになると思う。少なくとも私達の世代が、河内長野の20年先・30年先なんて考えると云えない。しかし、そこをかかわってもらえる宝楽委員もそうだけど、若い十代が駆け込んでこられる場を機会を作らないといけない。今、痛切に感じる。

宝楽委員

まとめていいですか。

成果なしで、声をあげる場がないということで、結局、文化の駆け込み寺がない。河内長野の課題ですね。まとめるとそういうことだと思ふ。また、才能がある人に気付けていない。プロデュース機能の問題にもなる。さらには、文化が育たないまちになりつつあり、しかも、若年層から少なくなっている。それをフォローするのが文化の駆け込み寺であり、評価ができる場ということになる。

資料2のように、結局、資源をどう活用するのかに行き着いてしまう。

それがひとつの方法論、ひとつのアプローチの仕方が、川上委員の発言にあった駆け込み寺を作っていくということや資源の再活用になっていくと思う。そういう具体的なアプローチとか、テーマの設け方をこの委員会で話していく必要があり、今日の残りの時間で、皆さんが出された意見と疑問点、今、出ている切り口を、幹事会で具体的に詰めていこうと思う。その視点で考えていく。

今後、委員会はこのテーマで、一歩進んだ感じが出てくると思う。

川上委員

私はこの4月の下旬にくろまるカフェでイベント作りを話させていただいた。イベントで生活をさせていただいてきたから、そこにかかわった現役だから、体験談しかしません。その中で、それを聞いてくれた人が、イベントというのは作ろうと思ったら、簡単に作れるが、ものすごく責任があるんだと気付いて欲しい。そのために、喜んでやらせてもらう。そういう形で、一つ一つ進めていくことが必要で、その一つ目をこの委員会で、何をするか重要になる。委員長が発言されたように、市の中にどんな人が何人いるのか、一つ一つ伝手をたどって行って、アーティストのリサーチをしないとだめでしょう。これだけの人がいるわけですから、このエネルギーを集めたらすごいみたいなことが、確証もてたら、おそらくアーティスト側もそうだし、それをプロデュースする側もそうだし、勇気がわくと思います。あとは、何をどこでするのかというのを考えればいい。

松村委員

自治会、子供会、そういう方とつながりを持って、地域に根付いた人（会長は年度で変わるでしょうけど）から作っていけると思う。一番しやすい方法かなと思う。

谷委員長

もともとあるネットワークですが、それで、情報があがってくるか、むずかしいと思う。

白井委員

今、話が出たように、もっと身近でわれわれが出来る、身近なアーティストの発掘から始めていく。そして、その人の要望を聞いていき、データベース化をし、ある程度グループ化していく。さらに、協働して何かをして、PRをしていく。やっぱり地道にできることを取り組んでいくのが一番いいと思う。

山田委員

ラブリールホールでそういう資料をもっていたと思うが。

川上委員

過去形だが、あったと思う。

山田委員

この前、知り合いがアーティストを調べる時に、ラブリールホールには一切相談に行かないで、個人的な伝手で調べた。すごく大変らしかった。

松村委員

個人情報というのが邪魔しますね。

山田委員

自薦の人のデータは生涯学習課が把握している。自薦の人だけで、他薦は入ってない。生涯学習課のリストは自分自身で登録しているデータであり、あの人、こんなことしてるんだというデータもある。

宝楽委員

生涯学習データベースのことですね。

渡辺委員

自分が実際活動をしているが、市の役割として、PRとか、そういう機会としての活動はやってほしいと思う。

そういう発掘という意味では、行政の側では、まだ、縦割りである。

自分で活動をしていると、損も得もあるが、何とかやっていけており、楽しさもある。一方、市が顔をだすと、あまり具体的にイベントの指導をしてしまうと、個性がなくなって魅力がなくなってしまふ。また、継続していく際に、ワンパターンにならないよう、リピーターの人にどれだけ飽きられないよう、お客さんの感覚をいつもくみながら、そういう発想ができるような情報について、市の方に多岐に勉強していただきたい。

結局、文化というのは質だと思う。そう考えていくと、精神的な大きなレベルでいろんなことを統括していくのが市の立場だと思う。

宝楽委員

まとめていいですか。

ネットワークについて、ラブリーホールで以前は資源のデータがあったけれど、今はない。理想は理想であり、個人情報壁になるが、やはり地道にやっていく、形を作っていく。市は発掘していきましょう、いまだに縦割りなのが課題である、広範囲に理解していきましょう、こんなのあるというヒントが伝わる場を作りましょう、文化は質で、数字で評価するのではない、精神的なものを示していこうという視点から意見が出た。

川上委員

行政でも個人でも、質を見る、質を感じるということは、すごく大事な言葉だと思う。質のいいものにどうやって出会うのかが決め手になる。

プロデュースするときも、プレーヤーとして誰かとセッションしたり、何かの機会の時に、

質のいいものにどう出会うかだと思う。それは最終的に自分の感性を信じるしかないと思う。また、そのようなことを言ったり、こんなことを聞いたり、聞かせてあげたい場が必要だと思う。どうなっているか聞ける場が欲しいなと思う。

渡辺委員

大きく考えたら、文化が高い地域は障がい者でも生きやすいと思う。

宝楽委員

今回、一度合意をとった方がいいと思うが、この価値転換を集約してきて、価値転換の中でも特に情報がわかるとか、人を発掘するという視点が欠如しているということに行き着くことと思う。

今後、委員会の中では、人を発掘するとか、情報発信するとかの視点の中で、提言していくことが、今後の議論になっていくと思う。そういう視点の話を今後していきたいと思う。観光政策に対して、提言する前に、まずは、地域資源を見えるものにしようということについて合意できれば、今日は一歩進んでいくと思う。

観光施策に対して、文化振興から手を出すのではなくて、その前に観光も文化も人もいろいろいるが、人を発掘しないと連携も縦割りも解消しない。

その人を発掘する仕方として、調査なのか公募して集めるのか、いろいろ方法論があると思う。

小西委員

このようなことを、どうやって広めたらいいのかなと。

宝楽委員

それをここで議論していく。

議論していくとだんだん深まっていくと思う。

今まで話の軸を広げてきたのかなと考えている。この表を作って、だんだん見えてきた。そこで今の課題をこの委員会で考えていくと、生涯学習データベースが活用されていない、市の職員が見に来ていない等。見に行く場所がないのかもしれないし、興味がないのかもしれないが。

このようなことを次にもう一回話し合ったほうがいいのではないかなと思う。

谷委員長

なかなか難しいことと思いますが、人を中心とした地域資源の発掘の部分は避けて通れない。ある程度、認識・把握できていれば、色々な戦略がたてられ、つなぐこともできるかもしれない。実施するための方法論としては、公募や調査があるが、“市民による市民のた

めの調査”にこだわりたい。場合によっては、公募による登録方法も併用するという考え方もあろう。

ラブリーホールの中長期的展開を考えた場合、ラブリーホールが文化の殿堂としての責務を果たす本質的な意義を再考することは大切となろう。ギャラリーに、作品を並べるだけでなく、市民、或いはグループから提出された創作に関するポートフォリオを展示するプレゼンテーションルーム化も可能であろう。真ん中にコミュニケーションブースを設けて、情報交換が活発におこなわれるあり方は文化を育てる現場になるだろう。そのような取り組みができたとすれば、アートサロンの源泉が発生し、おもしろいことになるのではなかろうか。文化の駆け込み寺的機能を果たす専用スペースがないから、理事長室を用いることはできないにしても、何か、アクションに結び付ける方策を検討することが必要である。文化の駆け込み寺の必要性については、本委員会において、何度もでてきているが、何度もでてきていることを大事だとわかっていても、何もしないのが問題である。形式的にいろんなことを毎年やっていくだけでなく、本質に迫っていくようなもの、もっと、将来的に文化のことを考え、今、種まきすべきことに力を注ぎ、かつ、あまり、お金を使わずやるにはどうしたらよいかを模索することが重要となろう。

このことに繋げていくためにも、やはり、人の発掘にこだわりたい。このような調査を実施するのは、実行委員会になるかと思うが、冒頭にも申し上げたように、落としどころをイメージしやすいかたちに提言をまとめることが、“行動する委員会”の使命である。体温が感じられ、かつ、一歩踏み出せそうな提言にもとづき、財政的にも無理がないあり方を十分に模索する必要がある。

河内長野の文化施策にとっての先行投資になるような、提言をまとめる際に皆さんの意見を聞きたい。先程の駆け込み寺構想については、それが真に機能することによって、河内長野の文化の底力を支えることになろう。有名かつ、偉い人を呼んできて、展示、上演される作品を鑑賞することも大事だと思うが、自分達が主体となってやっていくことも大切であり、それが両輪を成すことが重要である。

また、この委員会では、芸術文化を独自のスタンスで定義していかなければならない。

河内長野市は「こういうものを芸術文化と言います」と言うような宣言ができれば。色々な縦割りで排除されているものを全部集約していくシステムを構築することもできるだろう。予算折衝で獲得して、多少のお金がつけば、市民による実行委員会、市民調査隊をどう組織するのかを検討したい。本委員会のような審議会は客観的に評価を下す役割を担うことは承知しているが、この委員会は、“寄り添う委員会”をキャッチフレーズとしたい。よって、実行委員会の中の委員で興味のある方は理念から実践までを一貫して、携わってもらってもよいと考える。私も提言するだけでなく、この取り組みが円滑に実施できるよう、可能な限り、寄り添いたいと考える。

川上委員

キャッチフレーズは、わかりやすく伝えることができる。

谷委員長

限られた時間では難しいため、ここで出た意見を幹事会でまとめさせてもらいたい。少しずつ、前に進めていくため、提言書の骨格を作成したいと思う。理念的かつ、抽象的な提言とならないよう、引き続き、皆で議論し、動きだしたくなるようなものをまとめた

南委員

3つある。一つ目は、月に一度、決められた日で、私のギャラリーで出席可能な委員が集まるようにしたい。

二つ目は、河内長野市所蔵作品展をご覧になられた方いらっしゃいますか。せっかく一堂に集め展示した後、元の所に戻している。所蔵している課が異なり、借り物ということであるが、縦割りをなくし、りそな銀行のスペースに全く異なるものを飾ることを検討してほしい。銀行を待つ間に見る。お金がかからない方法がある。

三つ目は、くろまる関係は、1年間ベースにのっているの次世代を主に対象にする。60・70代は生涯学習で取り組んでいるので、次世代を対象にしていく。

魚返委員

くろまるキッズもあるので頑張って欲しい。

山田委員

そういうことを、この委員会で検証していけばいいのでは。

山田委員

人の資源の発掘のアイデアとして。

延命寺の住職の息子がギターコンサートを寺で開催している。ラブラリーホールの世界民族音楽祭のような委員会ではなく、知り合いの伝手で個人的に運営している。今後、神社仏閣を開放するところがあるかもしれない。また、神社、仏閣の新しい襖絵を必要とするところはないのか。コンテスト等はできないのか。訪問して聞きに行きたい。

有名な神社の襖絵は有名アーティストに依頼しているがそんな発想はないか。

谷委員長

河内長野市は、歴史遺産が多く、我が国の中で、文化財登録数の順位もすこぶる高い。それを活かした現代芸術とのコラボレーションもできると思われる。

川上委員

本物の作品、本物の人もいっぱいいる。ラブリーホールが持っているデータベースを開示して欲しい。それを基に、データの上積みをしたい。教育委員会の了承のもと、市の広報に載せれば反応があると思う。ホームページも同様に対応したい。そこから精査したい。

谷委員長

提言をした上で、データベースの作成を進めることについて、広報の協力は得られるか。

井上課長

システム作りのためであれば、問題ないと思います。

谷委員長

最後に、文化の駆け込み寺的機能を果たす施設の事例を紹介したい。淀屋橋近郊にある京阪中之島線大江橋駅に、京阪電鉄、大阪大学、NPO が共同で運営しているアトリエB1と称される場があり、様々なジャンルのコミュニケーションデザインが展開されている。アートマネジメントの専門家が各々の企画の相談にのってくれる取り組みもおこなわれ、注目されている。

そのようなことが、ラブリーホールほかでもできないか考えたい。財団として、その役割を担う人材を雇用したり、専用スペースを確保することは厳しいと思うが、館の事業だけでなく、全体の文化振興計画を推進していくことにも目を向ける必要性を感じずにはいられない。他のまちに先立って、河内長野が、この次元もカバーできる力をつければ、教育に加え、文化に強く、豊かな河内長野となるであろう。ただ、文化は、自然発生的にじわじわと出てくるのが重要であり、システム以前に、芸術文化とともに生きる市民の存在が問われることとなる。当面は、我がまちにおける芸術文化・市民文化を担う表現者等の人材の発掘と文化の駆け込み寺的機能の実現を中心に検討していきたいと思う。

次回はできるだけ早く開催したい。8月2日（木）を候補として考えたい。「滝畑フォレストアーツ2012」の開催を控えているため、事務局と検討し、日時を決めたい。